



災害の歴史

— 遺跡に残されたその爪跡 —



開催にあたって

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、平安時代初期の貞観地震津波に匹敵する巨大津波を引き起こし、東日本の太平洋沿岸地域で、多くの尊い人命とその地域に育まれた自然・歴史・文化を一瞬にして奪い去りました。

現在も被災地では復興作業が進められ、当市の各部署からも継続的に職員派遣を行い、文化財部門でも、23年4月以降、被災地の文化財資料の救出活動、緊急雇用創出事業での文化財レスキュー活動、また24年度からは沿岸2市において、高台移転に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査への協力や職員派遣、また当館での資料整理・展示発表なども実施してきました。

大震災から2年半が経過しましたが、より防災意識の向上に努めるため、過去の災害の歴史を知ることも必要と考え、今回は「災害の歴史」と題し、盛岡周辺の遺跡に残された災害の痕跡やその記録を辿ることとしました。

併せて当館には半世紀前、昭和30～40年代に調査された県内縄文時代研究の基礎となり、また当時の先学の足跡や業績を知る上でも貴重な三陸沿岸部の貝塚調査資料が保管されており、その資料の公開と、さらに遺跡の近傍に造立された近現代の「津波碑」などのモニュメントについても併せて紹介し、古からまた先人の方々がいかに災害と立ち向かい、乗り越えてきたか、その歴史を辿り、内陸部の方々にも知っていただくこととし、それによって沿岸部と内陸部の絆を強め、これから沿岸地域での郷土の歴史・文化・自然を取り戻そうという地元の強い願いの支援の一助になればと企画しました。

平成25年10月

盛岡市遺跡の学び館

Contents	
開催にあたって	2
目次	
開催要項・関連企画	
後援・協力者	
第一部 盛岡の災害	
I 東日本大震災と遺跡	4
II 火山噴火と遺跡	10
III 古代城柵「志波城」と災害	14
IV 盛岡城普請と災害	20
V 城下町盛岡と災害	26
第二部 三陸の貝塚と海嘯碑	
VI 三陸の遺跡と災害	32
VII 災禍のいしぶみ	49
附編	
□東日本大震災関連遺跡・文化財及び博物館施設等被害状況一覧	6
□三陸沿岸の主要貝塚	43

□主要貝塚と津波碑の分布	46
□地震・津波・火山噴火及び城下の災害関係年表(北海道・東北主体)	54
□引用参考文献と用語解説	64
□展示資料一覧	69
コラム	
□災害と岩鷲山	13
□絵はがきに見る災害	25
□中津川治水碑と護岸	31
□柳田國男と貝塚	40
VIII 資料(史料)編(右ページから)	
一. 古代	2
二. 岩手山噴火	5
三. 盛岡城普請と災害	10
四. 城下町盛岡と災害	19
五. 地震・津波記録など	25
六. 災害に関する俗言・伝承	40

開催要項

□盛岡市遺跡の学び館 第12回企画展

「災害の歴史 一遺跡に残されたその爪跡一」

会期/平成25年(2013)10月12日(土)から

平成26年1月19日(日)まで

会場/盛岡市遺跡の学び館企画展示室

主催/盛岡市遺跡の学び館

後援/(順不同)岩手考古学会 岩手史学会 岩手日

報社 朝日新聞盛岡総局 読売新聞盛岡支局

毎日新聞盛岡支局 時事通信社盛岡支局 共

同通信社盛岡支局 河北新報社盛岡総局 日

本経済新聞社盛岡支局 産経新聞盛岡支局

デーリー東北新聞社 盛岡タイムス社 岩手

日日新聞社 NHK盛岡放送局 IBC岩手

放送 テレビ岩手 めんこいテレビ 岩手朝

日テレビ 岩手ケーブルテレビジョン エフ

エム岩手 ラヂオもりおか ぼらん マ・シ

ェリ 情報紙游悠

関連企画

【特別講演会】

演題/「火山噴火と地震」

講師/岩手大学教育学部教授

土井 宣夫 氏

日時/平成25年11月24日(日)13:30~15:30

会場/盛岡市遺跡の学び館研修室

【学芸講座】

① 「災害と遺跡—縄文時代の貝塚を中心に—」

10月27日(日)13:30~15:00

講師:宮古市教育委員会 高橋 憲太郎 氏

② 「災害と遺跡—盛岡周辺の古代の遺跡を中心に—」

11月10日(日)13:30~15:00

講師:当館職員

③ 「災禍のいしぶみ—供養碑と海嘯碑—」

12月1日(日)13:30~15:00

講師:当館職員

協力者(順不同敬称略)

機関等 (財)石川啄木記念館 岩手県教育委員会

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財セン

ター 大船渡市教育委員会 宮古市教育委員

会 盛岡市立図書館 もりおか歴史文化館

個人 太田 梯子 高橋 憲太郎 田崎 農巳

土井 宣夫 山田 公一 吉田 義昭

図録執筆・編集

阿部 由里 大西 夏絵 木幡 里美 鈴木 俊輝

千田 和文 津嶋 知弘 室野 秀文 山岸 佳澄

山野 友海

○史料編は、活字本を原文のまま掲載することに努めました。変換不可能な文字については当用漢字で表しました。

○開催期間中、一部展示替えをする場合があります。

○表紙写真

上:「調査中の小出館跡から見た越喜来湾」(大船渡市越喜来)

中左:「宮野貝塚の調査風景」(大船渡市綾里)

中右:「姉吉の津波碑」(宮古市重茂)

下左:「志波城跡外郭西辺外大溝の調査」(盛岡市中太田)

下右:「盛岡藩国絵図控」(もりおか歴史文化館蔵)

○裏表紙写真

・陸前高田市埋蔵文化財収蔵庫跡地にて

I 東日本大震災と遺跡

災害の歴史

○今日の災害

日本は地震国で火山帯も多く、温暖多雨の気候で毎年台風も襲来する島国です。こうした地理的条件の中で多くの自然災害が発生し、それは地震や津波のみならず、火山噴火、集中豪雨・台風・竜巻などの風水害、旱魃、飢饉など、また場合によっては大火なども含まれますが、人々はそのたびに災害から立ち直ってきました。

平成23年(2011)3月11日の三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震は地震規模マグニチュード(以下、M)9.0という日本観測史上最大の数字で、巨大地震がもたらした大津波は東北地方から関東地方沿岸部に壊滅的な被害を与え、さらに近年では異常気象による集中豪雨や竜巻などの自然の猛威も多くの被害をもたらし、私たちにさらなる大きな試練を与えています。

「自然災害は日本の必然」、「災害を防ぐには、人間の寿命を十倍か百倍に延ばすか、ただし地震津浪の周期を十分の一か百分の一に縮めるかすればよい。(略)しかしそれが出来ない相談であるとすれば、残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう」(1933寺田寅彦「津浪と人間」)

震災後、福島原発事故調査・検証委員会の初代委員長となった畑村洋太郎氏は著書『未曾有と想定外』の中で戦前の物理学者寺田寅彦博士の小文を紹介し、これからの自然との付き合い方を「対抗」から「いなす」「すかす」へ、災害を力尽くで押え込み「闘う」のではなく、自然の力をうまく逃がしながら守る「折り合う」ことも必要と述べ、いわゆる「減災」の発想も生まれてきました。



大震災13日後の陸前高田市街(2011.3.24撮影)

○古代の災害

古代において「天災・^{ちよう}地妖」とは「災害」の表現で、人々は天神地祇を祀り、仏に祈ることでそれを鎮め、その地の妖の代表例が地震と噴火であったとされます。

また「地震は地上の支配者の統治が上手くゆかない時に起こるもの」とされ、聖武天皇の治世下で、天皇は地震被害地域を幸し、聖武天皇と光明皇后にゆかりの地が被害を受けたことで、大赦を行い、その詔には「朕が訓導の不明に由り、民多く罪に入る。責は予一人に在り、兆庶に關するに非ず」(『続日本紀』天平6年7月辛未条)とし、その責任を統治者たる自分が負うことを宣言したとされます。

その後の9世紀後半には、列島各地で連鎖的に地震が発生し、弘仁9年(818)の相模国・武蔵国に続き、貞観5年(863)に越中国・越後国、貞観10年(868)に播磨国、そして貞観11年(869)に陸奥国(東北地方太平洋岸)・肥後国、元慶2年(878)に相模国・武蔵国、元慶4年(880)に出雲国、そして仁和3年(887)にはいわゆる南海トラフ地震で、大阪湾に津波が押し寄せ、平安京では流言が飛び交い、怪異現象が出現し大混乱に陥り、不運にも8月20日には平安京を台風が襲い、鴨川・桂川が氾濫、京中は大水害に見舞われたといわれます。この惨状を目の当りにしていた時の天皇の光孝天皇(830-887)がにわかに崩御するなどの因縁めいた不幸が連続的に起こったともいわれています(保立監修2013)。

○遺跡に見られる自然災害の痕跡

遺跡の発掘調査では、住居跡や建物跡など人間の営みの痕跡を調査しますが、平成7年(1995)の阪神・淡路



津波湖上波高49.9mとされる重茂半島の姉吉地区(2013.5撮影)

大震災以降、遺跡調査において同時に噴砂現象などの地震災害の痕跡も発見され、注目されるようになりました。

『日本三代実録』に記された貞観11年(869)旧暦5月26日に発生した「貞観地震」(「九世紀陸奥海溝地震」)はM8.0、震度6強以上の巨大地震とされますが、平安京では有感地震と捉えられていませんが、巨大津波は多賀城下まで達し、溺死者約1,000人で、築地塀・倉庫・門・櫓など城柵の施設にも甚大な被害を及ぼしたことが詳細に記録されています。

かつて昭和57年(1982)頃の研究成果で、多賀城には4つの時期変遷があり、その第Ⅲ-Ⅳ期間の画期が貞観地震が引き金であったことは明らかになっていたのですが、1,142年後の東日本大震災にそれを活かすことはできませんでした(柳沢2012、保立2011・2012・2013)。

近年、仙台平野において、現海岸線から離れた遺跡で津波痕跡が検出された事例などは、今後、被災遺構の識別について、地形・地質学のみならず、多分野の研究者との連携により、防災・減災技術の構築のための必要性を提起しています。盛岡周辺でも、河川の洪水や変遷、地滑り、火砕流や降下火山灰の堆積など、台地のみならず、低地での観察調査は、文字で記録される以前の空白を埋めるため必要と考えられます。

東日本大震災と遺跡

○被害状況

東日本大震災では、沿岸部の津波被害をはじめ、岩手県内全域で地震により古美術品や歴史的建造物などの指定文化財をはじめ、数多くの史跡・遺跡(埋蔵文化財包蔵地)が破損・崩壊などの被害を受けました。

被害状況については盛岡大学・岩手大学及び研究者有志らで組織された「岩手歴史民俗ネットワーク」が早くから被害実態調査を実施し、公表されてきました。また歴史史料を含む博物館等展示収蔵施設の被害状況やレスキュー作業についても、全国の多くの関連機関・組織等の支援のもと開始され、現在も作業が継続的に行われています(※被害状況は別表参照)。

○復興関連調査

三陸沿岸部では大震災津波被害復興のための住宅地や道路建設に係る埋蔵文化財の発掘調査件数が増加し、岩手県教育委員会ではその状況に対応するため、平成24年度から全国都道府県教育委員会からの専門職員の派遣支援を受け、大幅に専門職員を増員して、沿岸各地域の分布調査、試掘調査及び市町村の調査支援を行っています。



崩落した岩手県指定史跡栗木鉄山跡の石垣(気仙郡住田町世田米字子飼沢地内)



津波により全壊した国登録有形文化財「酔仙酒造」の建物群(陸前高田市高田町)



津波により倒伏した海嘯碑(山田町船越 海蔵寺境内)

II 火山噴火と遺跡

岩手山の噴火の歴史

○岩手山の噴火

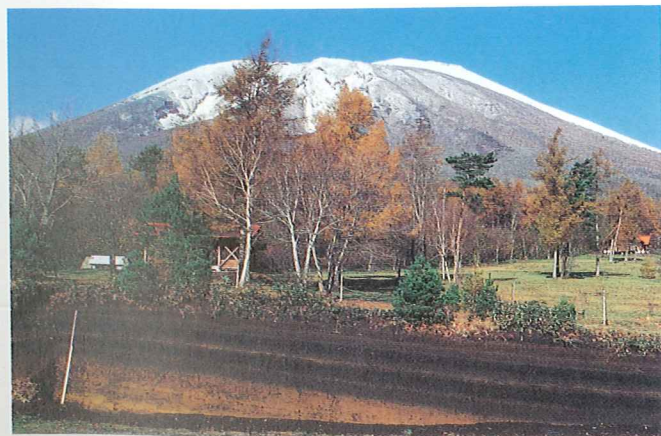
岩手山は県の北西部に位置する標高2,038mの県内最高峰の山で、山頂は八幡平市、岩手郡雫石町・滝沢村の一市一町一村に跨っています。

火山形成からみた岩手山は、那須火山帯に属する東西13kmにわたって25余りの火口をもつ岩手火山群に属し、そのうち西岩手火山は小規模な水蒸気爆発を繰り返し、東岩手火山は大規模なマグマ噴火を繰り返しながら薬師岳を形成してきました。

土井宣夫氏の火山灰及び歴史史料に基づく調査研究によれば、岩手山の有史以来の噴火は、十和田a火山灰が降灰した915年から江戸時代の貞享3年（1686）の間に2回、その後、絵図面・記録に残され推定される貞享3～4年（1686-87）の山頂部火口の噴火、享保16年（1731）12月から翌17年（1732）1月の北東山腹の熔岩噴出、大正8年（1919）のマグマ物質の噴出を伴わない水蒸気爆発、そして昭和期には昭和三陸大津波の翌9～10年（1934-35）と、昭和34～49年（1959-1974）までの噴気活動があったことが確認されています（土井2000）。

○火山灰に埋もれた遺物

昭和60年（1985）、盛岡市教育委員会の調査で、市内大新町遺跡から縄文時代草創期の「爪形文土器」が発見されました。同遺跡は昭和40年代に県内でも類例の少ない早期の押型文土器を出土した遺跡で、層的にはさらに下部の秋田駒ヶ岳を噴出起源とする赤褐色～青灰色粗粒火山灰の小岩井浮石（KP=AK-h）の直上の火山灰層



東岩手山麓の13,000年前以降の火山灰群
（滝沢村柳沢馬返し登山口駐車場：土井宣夫氏撮影）

から爪形文土器群と小型の無柄石鏃・削器・砥石等が大量に出土。浮石の噴出時期は¹⁴C年代測定では13,470±300年～16,300±550年とされています。

当時は寒冷気候の中での凍結融解による周氷河現象で、地表がイレギュラーとなり、凹地となった硬質の浮石層内に埋もれるように土器破片が検出されましたが、当時は依然と火山活動が活発な時期で、降灰により植生破壊や定着の遅れた裸地状態など、過酷な条件下であったことが窺われます。

また、岩手山の北東方向、現在の大更地区には塚山の小さな森が多く分布していますが、縄文時代前期の約6,000年前に大規模な岩手山の山体崩壊に伴う「流れ山」と呼ばれる平笠岩層なだれ堆積物で形成されたものです。さらに北東部の岩手町寄りの狐森山のなだれ堆積物の下層からは縄文時代早期後葉の貝殻条痕と絡条体圧痕が施された土器破片も採集されています。

「岩層なだれ」とは、不安定な山体斜面が崩落し急速に滑り落ちる山体崩壊で、土井氏の調査では、滝沢村の遺跡分布と山麓を埋める膨大な土砂（平笠岩層なだれ堆積物）の関係をまとめると、次のようになります。

- ①早期の土器はなだれ堆積物の下層から出土。
- ②縄文の集落遺跡の多くは、なだれ堆積物の外側に形成。
- ③範囲内であっても前期の集落は確認されていない。



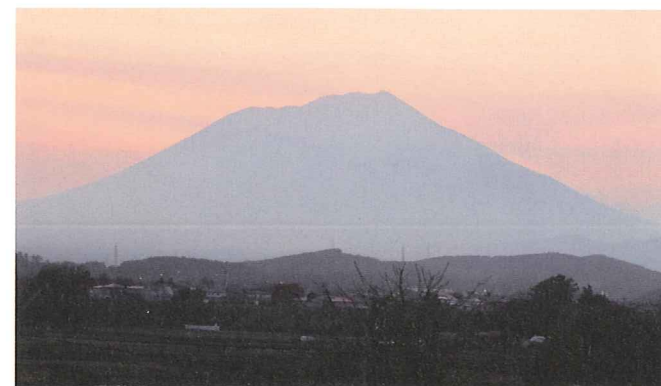
(上)
縄文時代草創期の爪形文土器を出土する小岩井浮石層上部（白札箇所が破片の出土地点）
(左)
復元された爪形文土器

このことから、岩手山麓の縄文人は早期末までは散発的に居住するも、前期の山体崩壊以降は一時期、集落の形成に適さない時期もあったことが想定され、集団的な移動の可能性も考えられます。しかしその後、中期中葉以降は平穏な時代を迎え、火山灰砂の滝沢台地には大規模集落が爆発的に増加し、豊かな狩猟採集の時代を迎えることとなります。

また遺跡から発見された古代以降の火山灰としては、近年、岩手山麓東方に位置する玉山区芋田沢田IV遺跡から「刈屋スコリア（KS）」と命名された江戸時代の貞享3年に噴火した火山灰が確認されました。芋田沢田IV遺跡は岩手山頂から東北東約15kmの河岸段丘上にあり、報告によると、火山灰は調査区北東部で検出された数条の溝状の道路状遺構の埋土の一部として凹地に堆積したもので、近世の遺跡検出としては稀有な事例とされています。

ところで岩手山の噴火記録で最も古いものは、かつて『雫石歳代日記』の天和3年（1683）の記事「三月三日より岩鷲山焼初申候」が初出とされていましたが、現在ではその記事は誤記とされ、実在しなかったとされています。それ以降、貞享3～4年（1686-87）にかけての噴火については、数多くの記録が残されていますが、残念ながら盛岡藩の公式記録『雑書』の貞享3年分は欠本となっており、その後の『内史略』・『聞老遺事』など多くの記録によれば、地震や泥流による洪水で山麓の村々に被害が及び、城下盛岡まで降灰があり、硫黄の臭気がしたなどの事実が記され、激しい噴火活動があったことを知ることができます。

その活動から約40年後の享保16年（1731）の暮れから翌年の正月にかけては、標高約1,000mの山腹から北東部に向かって熔岩が流れ出る、現在の「焼走り」を形成した噴火が記録されています。従来説では、焼走りは享保4年（1719）の噴火と言われてきましたが、最近の文献調査の結果では、享保16～17年（1731-32）成因説が有力となっています。



玉山区芋田から望む岩手山（2009年10月）



塚状の小さな森「流れ山」（八幡平市大更字平笠地区）



芋田沢田遺跡で確認された刈屋スコリア
（土井宣夫氏の調査）2009年10月



同上
（土井宣夫氏の調査）2009年10月



岩手山北東部中腹から扇状に形成された「焼走り」熔岩流
（2009年10月）

Ⅲ 古代城柵「志波城」と災害

1. はじめに

志波城は、平安時代初頭、延暦22年(803)に律令国家によって造営された、古代陸奥国最北端・最大級の城柵です。征夷大將軍であった坂上田村麻呂が「造志波城使」となり、一辺840m四方の外郭築地堀と櫓、五間一戸の外郭南門が建設されました。また、外郭築地線のさらに外側に一辺約930m四方の土塁を伴う外大溝を巡らし、城内中央南寄りの位置に一辺150m四方を築地堀で囲んだ政庁を配置、その内外に多くの掘立柱建物が整然と建ち並んでいました(写真1)。

文献によると、志波城は河川の度重なる水害を理由に、造営からわずか10年あまりで南の徳丹城へ移転したとされ、これを裏付けるように、主要な門や櫓、建物の柱は抜き取られた痕跡があり、それらが解体・運搬・再利用されたと考えられます。本稿では、志波城廃絶の契機になったとされる河川の氾濫と、城内区画溝の埋土に共通して混入する灰白色火山灰(粉状パミス)の噴出起源である十和田湖の噴火について、その概要を解説します。



写真1 上空から見た志波城跡(南東から)

2. 文献にみえる志波城の災害

志波城における災害についての文献記録には、『日本後記』弘仁2年(811)閏12月辛丑(11日)条があります。当時、征夷大將軍であった文室綿麻呂が志波城移転を建議し、認められた記事です。

征夷大將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使
 文室朝臣綿麻呂奏して言さく、……(中略)其れ
 志波城は、河浜に近く、屢水害を被る。須らく
 其の処を去りて、便なる地に遷し立つべし。……
 (後略) (樋口2011より一部を改変して引用)

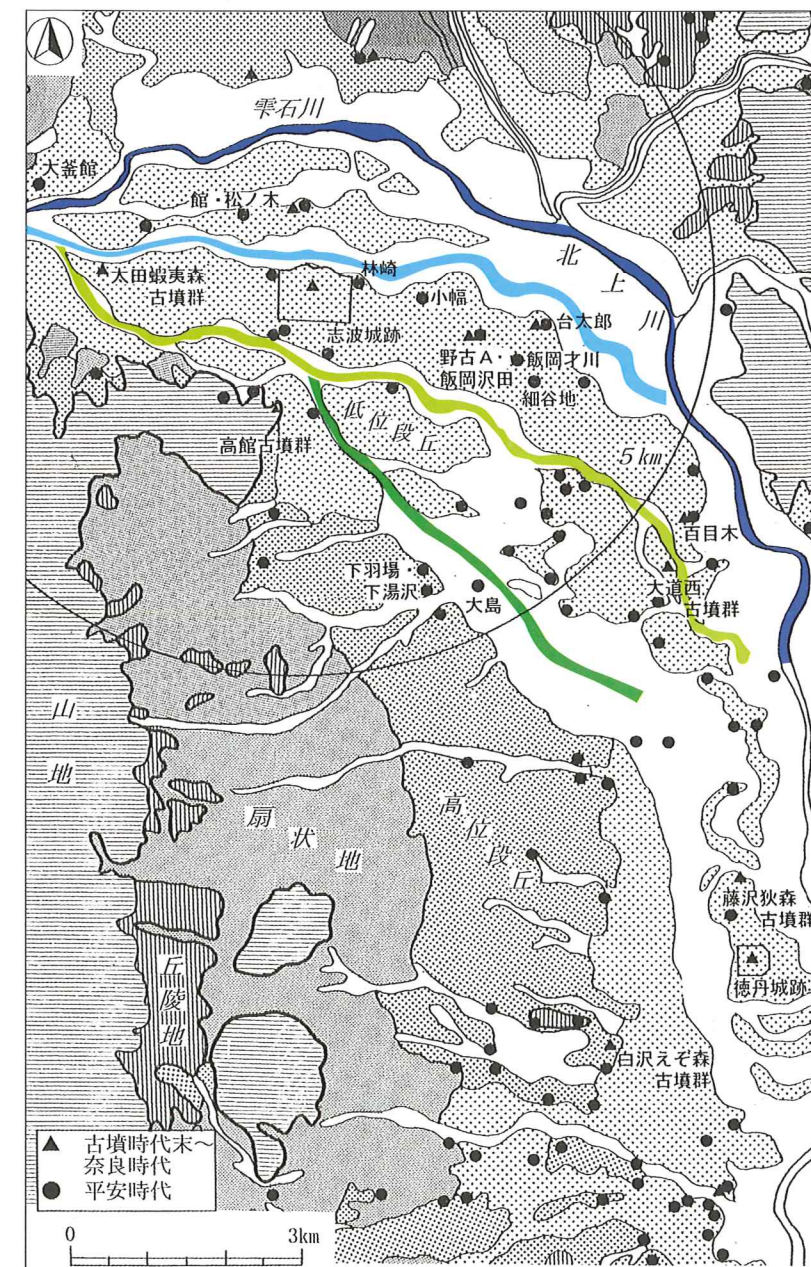
志波城は河川の近くにあり、何度も水害を受けるため、そこを去り良い場所、すなわち徳丹城に移転したい、という内容です。この記事を最後に、志波城の名は文献から姿を消し、長年幻の古代城柵となっていました。この有名な水害記事について、志波城跡周辺の地形と発掘調査成果から、検証してみます。

3. 発掘調査成果にみる志波城跡の災害痕跡

(1) 志波城跡の立地と周辺地形

現在の盛岡市は、北上盆地の最北端にあり、南北に流れる北上川と、その支流である雫石川・中津川という三河川の合流点に位置します。特に北上川と雫石川は、その合流点より南に低位沖積段丘を形成し、志波城跡はその上に立地しています。志波城跡の北方約2kmを東流する現在の雫石川は、西の奥羽山脈を源流としていますが、盛岡市上太田北の浦地点で大きく流路が狭められ、その下流は、昭和50年代に盛岡市郊外の繋地区に「御所ダム」が完成するまで、川の氾濫がしばしば起こる地帯であったことが伝えられています。

地形図によると、雫石川の南岸には、縄文時代以来の流路転換によって形成された幾筋もの旧河道がみられ、連続する大きなもので4条が確認できます(第1図)。これら大きな旧河道の南岸には河岸段丘が形成され、その標高値は南側から北側、つまり現雫石川へ向かって低くなっていて、河道が数千年をかけて北進したと考えられます。これら河岸段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上に水成シルト層が乗り、表土が覆います。しかし地点によって砂礫層の上面高や層厚などの様相が大きく異なっており、河道の定まらない流路によって堆積と下刻が繰り返されたことがわかります。



第1図 志波城跡周辺の地形と河道の変遷(緑→黄緑→水色→青) [津嶋2004に加筆]

IV 盛岡城普請と災害

1. 盛岡城の築城（慶長2年から寛永10年まで）

天正19年9月九戸の乱鎮圧後、南部信直（盛岡南部家初代）は豊臣家重臣の浅野長吉（長政）一行の帰途を鳥谷崎（花巻）まで同道した。途中9月10日、岩手郡不來方において、浅野長吉は南部信直の居城を不來方に築城するよう奨めた（『祐清私記』）。そこは室町時代以来、不來方の領主福士氏の不來方城が存在し、北上川と中津川合流点に位置する要害であった。福士氏は文録3年（1594）に城を南部信直に明け渡して岩手郡滝沢の鶴飼に移転した。慶長2年（1597）3月6日、南部利直を総奉行として築城の鋤初（鋤初）が執り行われ（『祐清私記』）、工事が進められた。城の縄張（基本設計）は浅野長政、縄張下司奉人（奉行カ）には加賀前田家家臣から南部信直家中に迎えられた内堀伊豆頼式があたっていた（『竹田加良久利』）。南北に長い丘陵のうち、南の淡路館（南館）には本丸、二ノ丸、三ノ丸が築かれ、石垣がめぐらされた。北の石間（内丸）に存在した慶善館（北館）は削り下げて、周囲の湿地が埋められ、城の外曲輪となった。この北側の本町、四ツ家付近と、中津川対岸の上の橋丁、紺屋町、肴町、十三日丁、馬場丁付近については、街道

を引き入れて町場とし、外側に堀をめぐらせて遠曲輪とした。

これにより本丸を頂点に、外曲輪、遠曲輪が扇形に配置され、遠曲輪には奥州街道が引き入れられ、四方に諸街道が延伸されて城下町が整えられた。大河の合流点という城の要害性は、有事の際には外敵の侵入を阻む頼みとなり、また舟運の利便性から城下の経済的発展を見込める場所であった。その一方で洪水の影響を受けやすく、築城から城下町の建設に至るまで、自然の猛威を克服しながら進めるという難事業であった。さらにこの地方の気象条件により、毎年冬季の築城工事は休止され、小笠原美濃、野田内匠を城代に、岩手郡、志和郡の侍たちに城を警護させ、春を待って工事を再開させていた。さらに北上川や中津川の度重なる氾濫により、堀に川水が押し入り、石垣が崩落するなど工事は困難を極めた。この間、南部利直は福岡城（二戸市）や三戸城（三戸町）を仮の居城としながら、築城工事が続けられた。慶長14年（1609）奥州街道の中津川渡渉地点に上の橋が架けられ、同16年（1611）には中の橋、翌17年には下の橋が架けられた。

元和2年（1616）7月28日（新暦9月9日）、三陸沿岸部に強い地震が発生し、仙台城の櫓や石垣に被害があり、海岸には津波が押し寄せた（『貞山公治家記録』）。盛岡城下の被害は詳らかではないが、同年10月28日に大槌で海嘯（津波）が発生し、多数の人や牛馬が溺死したという（『藩史草稿』）。発生の日日が3ヶ月異なるが、同年7月28日の被害を伝えているものであろう。翌元和3年（1617）、野田掃部を森ヶ岡城代として大修築（『藩史草稿』）が加えられており、藩主利直は福岡城（二戸市）に移転している。この大修築の原因については明記されていないが、前年の地震で盛岡城も相当な被害を

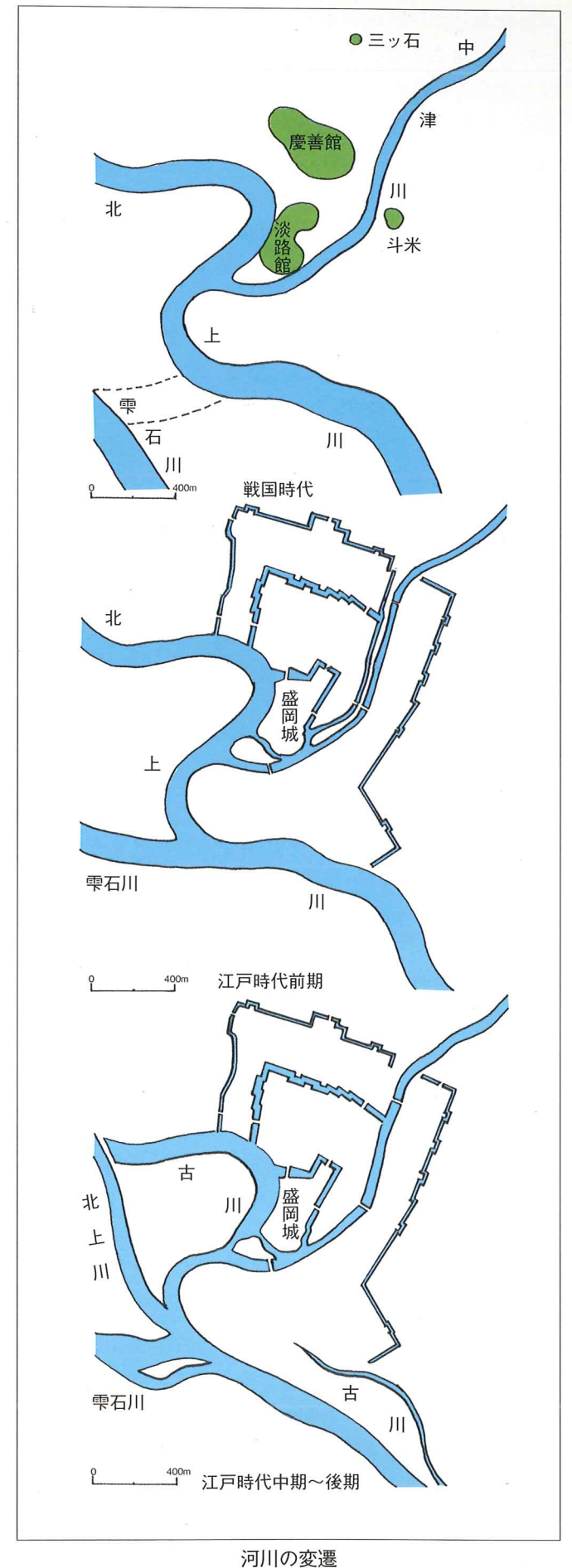
受けていた可能性がある。元和3年から同5年（1619）にかけて、盛岡城では本丸の拡張と腰曲輪、三ノ丸石垣が築造された（盛岡市教委2008）。現在残る本丸石垣のうち、本丸北西側から北側、東側、南側の石垣はこの時の築造である。元和5年（1619）南部利直が福岡から盛岡城に移転している（『郷村古実見聞記』）が、その後も水害等で安定せず、寛永6年（1629）幕府に願ひ出て志和郡郡山城を補修して予備城とし、盛岡城の築城を継続した。盛岡城が盛岡藩主居城として定着したのは、寛永10年（1633）5月、二代藩主南部重直（利直嫡子）の盛岡入城以後である。

2. 本丸火災と北上川洪水被害

寛永13年（1636）9月29日（註1）、南部重直が江戸表に出仕中、盛岡城本丸の三重櫓に落雷があり、貯蔵の筒薬（火薬）に引火し爆発。大火災となった（『盛岡砂子』）。これ以前に北上川、中津川には度々洪水が発生し、中津川三橋が流され、上の橋、中の橋は復旧されていたが、下の橋は城の防御のため舟渡しとなっていた。このため馬場町、清水町方面の藩士たちの登城を妨げ、消火活動に支障を来したという（『内史略』）。この火災で本丸は全焼し、「延宝以前まで焼け材木所々に積み重ね有りて、唯僅かなる御番所有りて、御番人居るばかり成り（『盛岡砂子』）」という有様であった。実際に本丸下の腰曲輪の発掘調査では、焼けた建物の壁材や瓦、陶磁器などの燃え殻が多く堆積し（『盛岡城跡Ⅰ』）、本丸火災の凄まじさを物語っている。本丸は寛永年間（1661～1673）まで空き地となっていたため、その間藩庁を外曲輪の御新丸に移して政務を執っていた。御新丸は寛永13年、福岡城（二戸市）の建物を引き移して造営されている。寛永14年（1637）には北上川に洪水があり、川の北岸で外曲輪南西側が大きく崩れた。このため藩では河岸を修復し、水流を緩和する目的で水除け石を設置した（神山仁1990）。

3. 本丸再建と北上川付け替え工事

寛永13年の本丸焼失と翌年の北上川洪水による被害を受けて、盛岡藩では本丸の再建と北上川、中津川の治水対策が懸案となっていた。江戸時代の大名の居城は、武家政権や大名権力の象徴であり、城を要とした城下町の構成は、そのまま封建社会の身分秩序を具現化していた。また領民生活の安定を計り、城下町を維持し発展させることは、幕府から藩を預かる大名家の責務であった。



現在の盛岡城跡と三川
（画面手前：中津川、左上手前：北上川、左上奥：雫石川）

V 城下町盛岡と災害

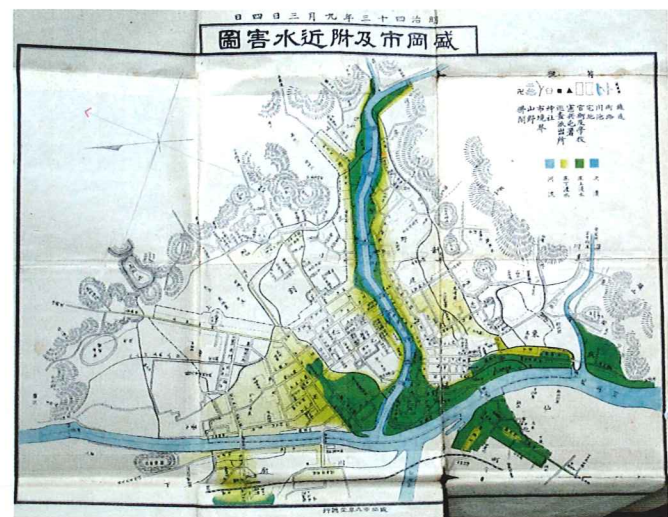
城下の災害

○城下盛岡と災害

城下町盛岡としての歴史は築城以来、400余年経過しましたが、太古の歴史から見ると、私たちの祖先は、後期旧石器時代の13,000年前から数々の自然災害を乗り越えながら営んできています。

那須火山帯に属する活火山の岩手山や秋田駒ヶ岳にも近く、有史以来、城下にも降灰した記録もあり、平成10年からの岩手山火山性地震は噴火の予兆となり、当時はハザードマップが全戸配布されたことも記憶に新しいところです。

また明治29年（1896）6月15日の明治三陸大津波の影響に隠れ、6月9日から9月にかけての盛岡の洪水や8月31日発生のM7.2の「陸羽地震」についてはあまり語られてはいません。地震は秋田・岩手県境の真昼山地を震源とする内陸直下型地震で、死者209人を数え、盛岡でも「四五日前より数度遠雷の如き音響あり」「地は土煙を揚げて上下し明に地表の波動を書くを認め家屋の震盪すること小船の波浪に翻弄せらるゝが如く柱梁の軋る響、物品の顛落する音戸外に達し、地の鳴動は人の罵る声と和し、雑然聳然人皆家を空うして走り出たのち強震つづいて夜に至り、二昼夜に及んだ。（中略）」とされ、余震も10数日間毎日数回あり、当時は岩手山噴火の噂も飛び交ったとされています。災害年表にも記しました



「盛岡市及附近水害圖」『盛岡市明治四三年水害誌』の附図（盛岡市九皇堂発行）

明治43年（1910）9月3日4日の被害状況が石版多色刷りで色分けされている。（紺色＝決壊箇所、緑色＝床上浸水、黄色＝床下浸水、青色＝河川）
もりおか歴史文化館 蔵

が、「明治三陸大津波」の前後には濃尾地震をはじめ、東日本各地でM7.0以上の地震が頻発しているのですが、大災害の陰に隠れ、記録は残りながらも、人々の記憶からは遠ざかっているのは事実で、関東大震災はその27年後、東日本大震災はその115年後に起こっています。

江戸～大正期の洪水被害

年（西暦）月	増水氾濫河川	被害状況
寛文2年（1662）9月	（白髭水）	中津川三橋流失、溺死者数百人
寛文10年（1670）6月	（第二の白髭水）	中津川三橋・夕顔瀬橋流失
貞享2年（1685）7月	中津川	土手崩壊
元禄15年（1702）6月	不明	洪水にて橋流失あり、紺屋町浸水
宝永4年（1707）7月	北上川・中津川	新山土橋流失、下小路屋敷浸水
享保9年（1724）6月	北上川・中津川 （第三の白髭水）	中津川三橋流失、馬場丁・鷹匠小路浸水
寛政7年（1795）6・7月	北上川	新山付近洪水
享和元年（1801）6月	雫石川・中津川	桜馬場・馬場丁・多賀・鷹匠小路・仙北丁ほか浸水、橋・家屋流失
天保5年（1834）6月	北上川	夕顔瀬橋流失、川筋田畑損耗多し
天保6年（1835）7月	北上川	夕顔瀬橋流失、馬場丁・鷹匠小路浸水
天保8年（1837）6月		鉦屋町・十文字付近浸水
嘉永3年（1850）9月	北上川	大風雨、舟橋流失
安政元年（1854）5月	雫石川	三ツ家家屋32戸流失、鷹匠小路・馬場小路・川原小路浸水
慶応4年（1868）5・6月	中津川・北上川	概橋流失、舟橋引上げ
明治7年（1874）6月	北上川	明治橋流失
明治8年（1875）10月	北上川・中津川	明治橋・夕顔瀬橋・上ノ橋・下ノ橋流失
明治10年（1877）9月	中津川	下小路仮橋流失
明治11年（1878）7月	北上川・中津川・雫石川	下ノ橋仮橋流失、馬場小路・多賀・川原町等浸水、明治橋破損、三ツ家家屋二戸流失
明治23年（1890）4・7月	不明	（大水）
明治29年（1896）6～9月	北上川・中津川・雫石川	夕顔瀬橋、開運橋、築川橋損壊・流失、市内各町内浸水、一部倒壊、上田堤決壊の虞
明治30年（1897）9月	北上川	開運橋損壊
明治31年（1898）8・9月	中津川	山岸・下小路私設仮橋流失、大沢川原耕地3反歩余決潰
明治33年（1900）8月	北上川・中津川	仙北組町ほか橋梁・家屋流失、浸水、死者1名、上ノ橋損壊
明治43年（1910）8・9月	北上川・中津川・雫石川	9月3・4日、未曾有の大洪水（本文参照）
明治44年（1911）2月	中津川	川留橋・よの字橋流失、下ノ橋損壊
大正2年（1913）8月	北上川	開運橋中央部流失

（1962『盛岡市史』、1983『図説盛岡四百年上巻』による）

○洪水の歴史

太平の世の江戸時代、盛岡城下を最も脅かしたのは、地震はもとより、洪水と大火であったとされます。

南部氏が不來方の地に築城するに至った理由のひとつには天然の要害となる河川が集中し、また水陸交通の要衝としての立地を考慮したと考えられますが、北上川・雫石川・中津川そして築川・諸葛川などから流入する大小河川の洪水・氾濫には常に悩まされ、城の普請も30余年という長い年月を要しました。

また昨今の豪雨災害と同様、流域別の局所的集中豪雨もあり、享和元年の水害は北上川ではなく、雫石川・中津川・築川など東西から流入する河川の氾濫で、河川に近い土地での浸水被害が記録されています。

寛文2年や同10年などの中津川・北上川の氾濫は、伝説に言う所謂「白髭水」^{しらひげみず}（*解説）と呼ばれる大洪水で、それにより藩は延宝元年（1673）に幕府の許可を得て両河川の治水工事に着手、延享2年（1745）丑5月に出された藩仰出書には天災についての心得も布令されています（史料編19頁）。しかしながら、近代に入っても治水は儘ならず、明治時代以降も度重なる洪水に見舞われていました。

○明治43年9月の大洪水

明治43年（1910）8月31日から降り出した秋雨は、9月2日夜半に180mmの豪雨となり、3日には中津川・北上川共に増水し続け、4日の北上川水位は平常より3m高い5.3mとなり、濁流は市街地に流れ込み、中津川三橋（上ノ橋・中ノ橋・下ノ橋）、上流の葉師橋、北湯橋、与の字橋・毘沙門橋・明治橋は流失。城南小学校（現杜陵小学校）や盛岡尋常高等小学校（現下橋中学校）、さらに盛岡高等女学校（現盛岡第二高等学校）の寄宿舎も半壊流失しました。市内交通は遮断され、辛うじて電話により情報収集し、市内11箇所には罹災者の避難所、7箇所に炊出しの給与所を設けられました。この洪水で最も惨状を極めたのは、市内の中津川沿いの下小路^{かわら}、積町（現加賀野1丁目）、鍛冶町、紺屋町、川原小路・馬場小路・鷹匠小路（現下ノ橋町・馬場町・肴町・清水町）など河川左岸の地域で、被害は死者1名（3名説あり）、負傷者1名、住家全壊17、半壊49、破損271、流失69、床上浸水1,343、床下浸水1,147、橋梁流失11、田浸水約120町歩、畑浸水65町歩、被害総額は当時の金額で711,556円という、甚大な被害となりました。

○「盛岡水害写真帖」から

もりおか歴史文化館 蔵



「大矢馬太郎自宅全流」

「…積町に激する水は加賀野・鍛冶町・紺屋町に横流して午後五時過ぎ遂に大矢馬太郎氏所有の土蔵を破壊し家財を散失したるを始めとし、附近の被害夥きを致せり。」（昭和7年6月「岩手日報記事」から）



「岩手公園より下の橋附近」
家屋材を利用して仮橋を架設している様子



「下ノ橋小路橋附近」
下ノ橋付近の川原で女性が被災した衣類を洗っている様子。奥は盛岡尋常高等小学校（現在の下橋中学校）

VI 三陸の遺跡と災害

丘陵や尾根上の遺跡

岩手県教育委員会の調査によると、県内には約12,500カ所の遺跡が存在し、うち沿岸部の12市町村の遺跡総数は3,612カ所で、時代別では縄文時代が7割の2,610カ所、古代（古墳・奈良・平安時代）が1,444カ所を数えます。立地の特徴は標高の高さで、縄文時代の根井貝塚（野田村）の標高は225m、崎山貝塚（宮古市）が130m（縄文貝塚の一覧表の標高の項目参照）、平安時代の島田II遺跡（宮古市）が16~84m、新館遺跡（野田村）が42mなどを測り、海岸段丘の丘陵上や尾根に立地しています。

そのうち、今回の東日本大震災の津波で冠水するなどの被害のあった遺跡は部分冠水も含め241カ所（6.7%）を数え、全体が水没した遺跡は殆どないと言われている（遺跡数は平成23年3月現在）。

遺跡が丘陵上に多いだけ、高台移転に伴う復興関連事業では発掘調査を必要とする箇所も多く、より迅速に対応できる調査組織体制が不可欠となっています。

三陸沿岸の貝塚

「貝塚」は人間が採取し捨てられた貝殻などが堆積し残存している場所で、遺跡全体もしくは遺跡の一部で確認されます。時代は縄文時代を主体としますが、三陸沿岸では、弥生時代から平安時代、そして中世~近世の遺構から検出される場合も見られます。

昭和39年（1964）の『岩手県遺跡地名表』及び43年の『同（補足）』によれば、岩手県内の埋蔵文化財包蔵地数は約2,300カ所で、うち沿岸市町村で「貝塚」で種別登録されている遺跡もしくは「貝殻出土」の遺跡は62カ所を数えますが、平成10年（1998）の『岩手の貝塚-岩手



太平洋側から見た隆起海岸の地形
（田野畑村羅賀地区：岩手県埋蔵文化財センター提供）

県内重要遺跡詳細分布調査報告書II』では、増加し、沿岸12市町村では1.6倍の102カ所を数えます。

また岩手県内には「貝塚」という名称で登録されている遺跡もしくは貝層や獣骨・魚骨等が確認された遺跡は内陸性貝塚を含め、約130カ所確認されています（岩手県教委1998）。全国的には県南の一関市花泉地区の「貝鳥貝塚」を始めとする淡水系貝塚も有名ですが、三陸沿岸部を主体として分布している貝塚は、北部の洋野町から南部の陸前高田市までのおよそ総延長670kmの海岸線近くでは約110カ所の貝塚が確認されています（分布図参照）。

その分布は、久慈・洋野地区から田老地区の隆起海岸地形より、宮古市以南の複雑に湾（入江）が入り込むリアス式海岸の発達した地域に多く形成され、特に宮古湾・山田湾・大槌湾・釜石湾・唐丹湾・吉浜湾・越喜来湾・大船渡湾・広田湾にかけては、古くは明治時代から調査されてきた学史的に有名な貝塚も存在しています。

貝塚調査の歴史

県内における貝塚調査の歴史は古く、研究史については県の報告に詳細に掲載されています（岩手県教委1998）。

江戸時代では、菅江真澄が三内丸山遺跡の縄文土器を紀行文『栖霞の山』で紹介したように、盛岡・仙台領内でも、記録・地誌に遺址・遺跡・遺物の発見・見聞記録も散見されますが、明治時代前半に岩手県が編纂した『巖手縣管轄地誌』において、貝塚を含めた「遺跡」についての記述・紹介は多くありません。県内の貝塚を本格的に紹介したのは、気仙郡小友村（現陸前高田市小友町）出身の博物学者鳥羽源蔵（1872-1946）で、明治29年（1896）に人類学雑誌に小本村の沢辺・門前の2遺跡を紹介する小論「陸前国気仙郡ノ石器時代遺跡」を発表。貝層の存在を報告していますが、まだ「貝塚」という表記はなく、明治32年（1899）に東京帝国大学の八木契三郎が県内の遺跡踏査の時、鳥羽も参加した門前と瀬沢の2カ所の遺跡に初めて「貝塚」という表記をしました。

その後、明治時代後半から大正時代にかけて、陸前高田市の門前・瀬沢・中沢浜の各貝塚、大船渡市の長谷堂・細浦上ノ山の各貝塚、宮古市の鉄ヶ崎館山・大付・磯鶏館山などの貝塚調査が実施され、昭和期に岩手県の貝塚調査の規制がなされるまで続きました。

調査された沿岸部の主要貝塚

今回の企画展出展の貝塚資料は、戦後昭和30年代以降の調査・収集された資料で、当時は東登・菊池啓治郎・及川洵・草間俊一・吉田義昭氏ら県内在住の研究者及び慶應義塾大学の江坂輝彌氏、早稲田大学の西村正衛氏らによって精力的に沿岸部の遺跡の踏査や発掘が行われていました。地域的には宮古市、山田町、大船渡市（旧三陸町）、陸前高田市の4市町13遺跡を数え、一部は考古学年報で公表されていますが、未報告資料も含まれ、今後の詳細な調査報告が必要とされます。

ここでは沿岸北部地域から順に調査履歴のある主要な貝塚も併せて紹介いたします。

ふたごいづか 二子貝塚（久慈市長内町）〔久慈市指定史跡〕

○標高30m（周辺の津波遡上高10.45m）

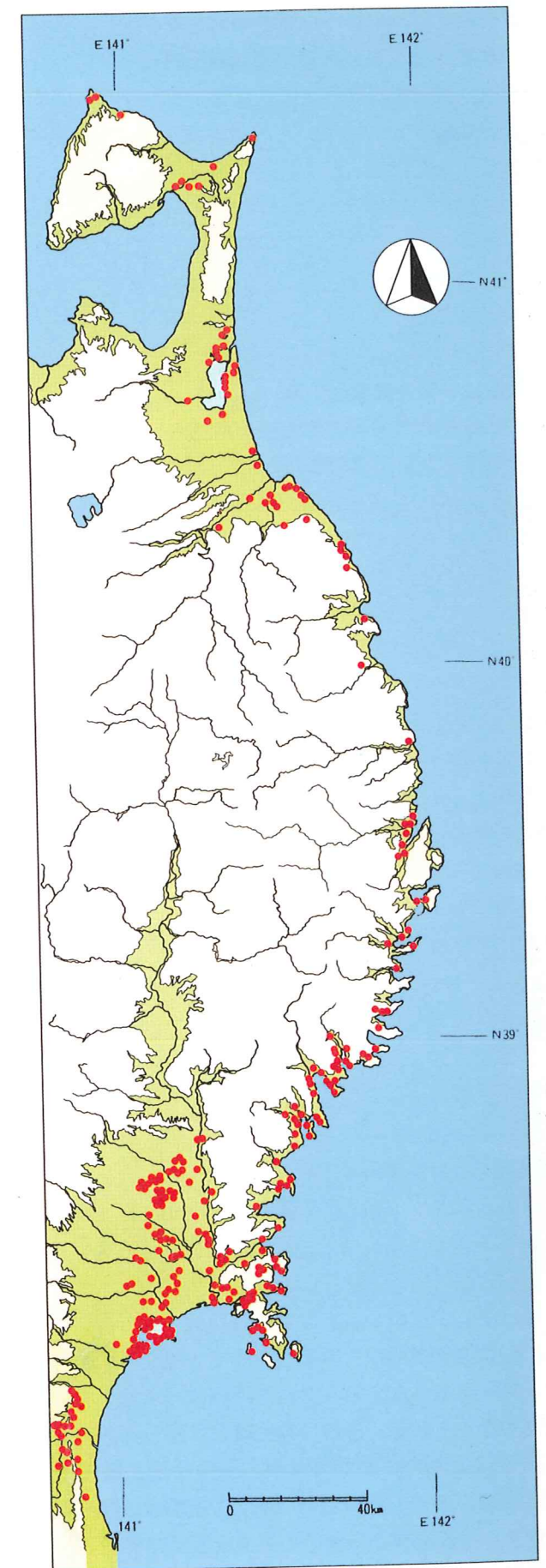
二子貝塚は、県北部沿岸地域に発達した隆起性海岸段丘上の標高30mの位置にあり、北部は玉の脇川に開析され、貝層は南東-北西方向に帯状に形成されている。昭和24年（1949）、道路改修工事中に縄文時代晩期中葉のほぼ完形品の大型遮光器土偶が出土したことで有名となった。平成元・2年（1989・1990）の市教育委員会の調査では、縄文時代後期・晩期の埋甕遺構2基、土坑3基、集石遺構3基及び埋葬人骨4体を検出。出土遺物で、骨角器では鏡先・骨鏃・根挟み・骨篋・刺突具など、自然遺物では岩礁性の貝類のほか、魚骨・獣骨・鳥骨などが出土している。

ねいづか 根井貝塚（九戸郡野田村大字玉川字根井）

○標高225~230m

三陸北部の隆起海岸上の数少ない貝塚の一つで、標高225~230mと高位の海岸段丘上に位置し、貝塚から海岸まで直線距離で3kmで、特異な立地を呈している。昭和6年（1931）に小田島祿郎氏により12㎡ほどが発掘されている。

出土土器は縄文時代後期~晩期にかけての時期であるが、貝層の分布は局地的で、かつ後期に属するものとされている。貝層は後期末葉の竪穴住居跡の埋土中からも検出され、遺物の在り方や炉の構造から住居廃棄に伴う祭祀の痕跡とも推察される。貝類では、イガイ・ムラサキイッコ・タマキビが多く、魚類ではマダイ・アイナメ・マグロ・エイ・カサゴなど、哺乳類ではニホンジカ・イノシシ・タヌキ・キツネ・クマ・ノウサギなどを検出。骨角器では釣針・骨篋・ヤス・銚・骨針などが出土している。



三陸の貝塚

〔崎山貝塚〕パンフレットから 宮古市教育委員会 提供

Ⅶ 災禍のいしぶみ — 供養碑と海嘯碑 —

被災地に残された“いしぶみ”

○“津波碑”とは

瓦礫撤去がおおよそ収束した時期、建物が無くなった集落の道路端や社寺の山門周辺に、墓碑や供養碑に混在して、「海嘯碑・津浪（津波）碑・津波記念（祈念）碑」（以下、津波碑）と記された石碑が多く目に入ります。これらの碑は、明治29年（1896）6月15日の「明治三陸大津波」と昭和8年（1933）3月3日の「昭和三陸大津波」を契機に造立されたものが多く、明治碑の場合は犠牲者の慰霊・供養のため、個人や篤志家の寄進ないし地域の発願で建立された「慰霊碑・供養碑」的性格が強いものと、昭和碑の場合は義捐金を活用して公的機関が設立し、その地域住民に対しての津波災害に対して避難などを促す警句的文言が刻まれた記念碑的性格のものなどがあります。

それぞれの形状は自然石であったり、板状の粘板岩を使用した通常の顕彰碑型のものなど様々で、今回の津波被害を受け、寺院境内や路傍で倒伏したもの、傷みながらも辛うじて立ち竦んでいるものなど、瓦礫が撤去された後も現地にポツンと残されていますが、しっかりと花も手向けられ、地元の方々に手厚く守られていました。



明治三陸大津波以後に建立された「南無妙法蓮華經八大龍王鎮座」

釜石市鶴住居町片岸 所在

○津波碑の分類

津波碑はかつての市町村単位の古碑調査では、いわゆる「記念碑」・「供養碑」に分類されている場合が多いようですが、通常海難事故慰霊・供養碑とは区別され、碑文には「溺死」「横死」という文字も刻まれ、非業の死を遂げ、亡くなった方々の無念、そして造立者の遺る瀬無い想いもそれぞれの碑から伝わってきます。

形状的には楕円～細長い自然石タイプと、頭部を山形に整形した板状の大型板状タイプ、角柱状に細長い石標タイプ～小型板状タイプに大別されます。



(左) 明治碑の自然石タイプ 宮古市赤前所在の「海嘯記念碑」。

(右) 明治碑の大型板状タイプ

大船渡市三陸町吉浜 正壽院所在の「嗚呼惨哉海嘯」。

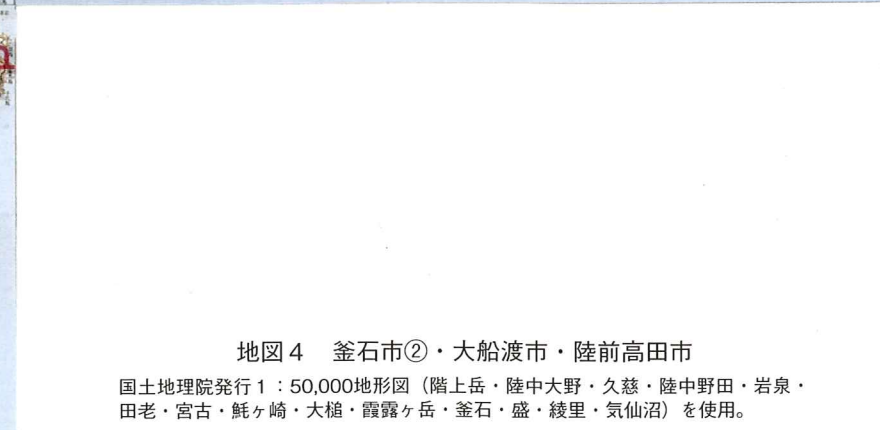
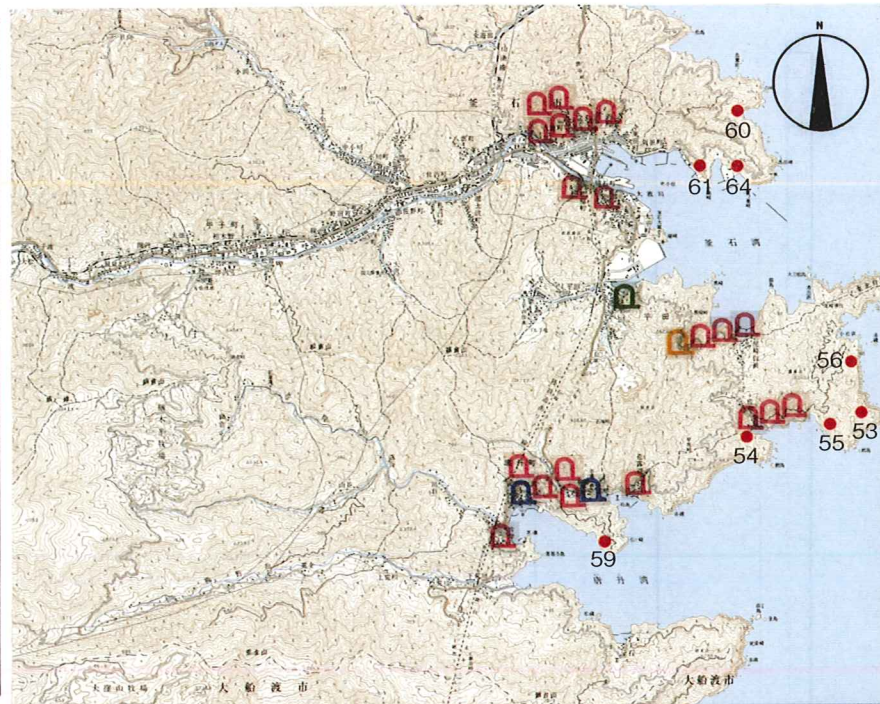
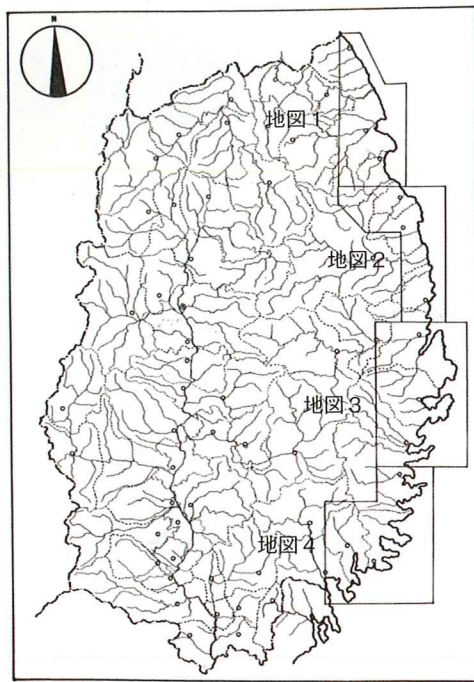


(左) 昭和碑の自然石タイプ

釜石市両石所在の「津波記念碑」。東京朝日新聞社寄託義捐金で旧鶴住居村長 古川徳次郎名で建立。書は当時の石黒英彦知事で、同形の碑は複数確認されている。

(右) 昭和碑の大型板状タイプ

大船渡市崎浜漁港所在の「津浪記念碑」。海側の裏面には警句として「長く大きく揺れる地震は 津浪乃警報と心得 直ちに近くの高地へ避け 一時間位はその場を離れるな」と記されている。越喜来村長 石川敏敏 建立



地図4 釜石市②・大船渡市・陸前高田市

国土地理院発行 1:50,000地形図（階上岳・陸中大野・久慈・陸中野田・岩泉・田老・宮古・鮎ヶ崎・大槌・霞露ヶ岳・釜石・盛・綾里・気仙沼）を使用。

VIII. 史料(資料)編

一. 古代

日本後紀……………2
日本三代実録……………3

二. 岩手山噴火

岩鷲山噴火……………5
岩鷲山噴火……………5
岩鷲山噴火……………5
岩鷲山崩並神官別當之事……………6
貞享三年の噴火……………7
焼走り形成時の噴火記録……………8
巖鷲山鳴動……………9
岩手山ノ噴火其他……………9

三. 盛岡城普請と災害

不来方城主福土政長……………10
不来方淡路……………10
不来方城築城……………11
不来方城……………11
不来方城縄張……………11
盛岡築城……………11
盛岡城……………11
中津川三橋普請……………12
中津川三橋擬宝珠……………13
中津川三橋擬宝珠……………13
南部利直三戸城より盛岡城に移る……………13
南部重直盛岡御着城……………13

四. 城下町盛岡と災害

延享二年 天災……………19
寛文二年 白髭水……………19
白髭水……………19
北上川堀替、新土手普請……………19
寛文十三年 上田堤決潰……………19
享保九年 洪水……………19
享和元年 中の橋懸替……………20

本丸焼失……………14
御新丸造営……………14
御新丸普請……………14
新丸普請奉行……………14
御新丸柱立……………14
花巻城際北上川の付け替え……………14
郡山城破却し盛岡城本丸普請……………15
郡山城取壊……………15
盛岡城本丸普請……………15
盛岡城二階三階櫓造立……………15
盛岡城本丸普請……………15
盛岡城本丸普請……………15
盛岡城本丸普請……………15
盛岡城本丸普請……………15
重信盛岡城三階櫓造立……………16
盛岡城石垣普請……………16
石垣普請奉行銘……………16
盛岡城修補……………17
吹上門脇普請奉行銘……………17
藩蔵造立……………18
淡路丸高堀、槽繕い……………18
御三階鯨並高さ之事……………18

五. 地震・津波記録など

安政ノ地震ト海嘯……………25
三陸の津浪……………26
岩手縣昭和震災誌 抜粋……………28
今村博士の地震漫談……………33
地震の番人……………37
遠野物語……………38

六. 災害に関する俗言・伝承

動植物と洪水・大水……………40
動植物と地震……………40
唱えと地震……………40
住まいと地震……………40
自然現象と津波……………41
動植物と津波……………41
天候と災い……………41
流れ星・彗星・彗星……………41
海嘯碑・津波碑一覧……………42

盛岡市遺跡の学び館 第12回企画展
東日本大震災復興支援

「災害の歴史 -遺跡に残されたその爪跡-」

平成25年(2013)10月12日 発行
編集・発行 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600 FAX019-635-6605
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL <http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/rekishi/manabikan/index.html>

印刷 河北印刷株式会社